

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和4年3月23日（水）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：更田委員長

### <質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから3月23日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問のほうをお願いいたします。質問のある方は手を挙げてください。

では、ヨシノさん、お願いします。

○記者 すみません、テレビ朝日のヨシノです。

先日の地震で、去年の2月に引き続いて、また福島第一原子力発電所、明確なのは、1号機の水位が40cm低下したということで、毎度毎度になっちゃっているんですが、注水量を増やすことしか対応のしようがないようなんですけれども、例えば水中ROV（水中ドローン）なんかでデブリ調査ができるんだったら、損傷箇所の調査なんかはできないのかななんて思うのですが、その辺は難しいんでしょうか。

○更田委員長 そうですね。恐らく難しい、相当難しいと思いますけどね。カメラで見ていくといっても、水質の問題もあるだろうし、照明の問題もあるでしょうし、それから、液体の漏えい箇所なので、必ずしも、ああいった、本来溜まるべきではないところへ溜まっている水の漏えい箇所を見つけるというのは、それはもう本当に、技術的に難しいだろうと思います。

○記者 そうなると、やはり、言わんや修復も難しいということですか。

○更田委員長 できるだけ早くドライアップを進めるということに尽きるんだろうと思っています。ドライアップも、一定程度の水位になってきたら、今その滞留している水の中に入っている放射性物質の量は格段に少なくなっている。浄化して戻すというのを東京電力が随分やりましたので、今滞留している水の中に含まれている放射性物質の量は、桁で下がっているのです、そういった意味では、ある程度の水位になったら、これは東京電力の判断ではありますけど、例えば海水配管トレンチでやったように、その水ごと固化してしまう。一旦固化してしまう。固化してから研るというやり方はあると思いますので、いずれにせよドライアップを急ぐということだろうと私は思っています。ただ、それには、今まだかけ流しをやっていますので、あれを。これはなかなか技術だけではなくて、様々な方への御理解をいただくというプロセスも非常に時間がかかるんだろうと思っていますけれども、あのかけ流しを今度止めて、空冷化して、そしてドライアップするという、そういうことだろうと思いますね。

○記者 最後にしますけど、そうしますと、今おっしゃったように、配管トレンチでやったコンクリート固化みたいなのは、デブリごと固化するという事なんでしょうか。

○更田委員長 原子炉建屋の底部で今水が溜まっているようなところに、いわゆるデブリ、それはだから、確認にもよりますけれども、ほとんど優位なデブリは存在しないという上で固化するという事になるし、何を、どのくらいの量をもってデブリというのか、マイクログラムまでデブリと呼ぶのかどうかという話ですから、そういった意味で、あるところで現実的な判断は必要だろうと思います。全ての水を引いて、引いたところで今度は集めてくる、ドライアップするためには、そのときにはかけ流しもしていない状態で、その状態からドライアップして、清掃というか、どう洗うんだと、いずれにしろ、一旦それほど深くない水位を固化してしまって、後から研るのでも同じことなので、そういった意味で、どこかで一旦固めるという判断はする必要があるだろうというふうに思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問ございますでしょうか。

では、オカダさん、お願いします。

○記者 毎日新聞のオカダです。

今の関連で、先日の地震の後に、その1Fの1号機の格納容器の水位が下がったことについては、これは昨年2月の地震でも水位が下がりましたが、どのように見られていますでしょうか。

○更田委員長 まだ外との間のパスがある以上は、やはりその揺らされると、水位の変化があるというのは、状況は変わっていないわけですから。

特に今回は、これも全く同じ条件で測定されているかどうかというの確認が必要ではありますけれども、昨年2月13日に比べて今年3月16日の地震は、鉛直地震動、鉛直の加速度が大きかったとみられているので、そういった意味でやや影響は大きく出たんじゃないのかなというふうには思っています。ただ、これもまだ調査、確認を続ける必要があるだろうというふうには思いますけどね。

○記者 耐震性という観点での懸念というのはどうですか。

○更田委員長 ちょっと余りにざっくりしすぎてはいるけれども、常に懸念は持っているわけですが、すでに懸念を持っているから、検討用地震動に耐えるようにというのをやっているわけですが、そうですね、なかなか設計されて建設された当初の構造を保っているわけではないので、本当に言うと、そこら中に例えばひずみゲージを貼り付けるみたいなことが可能であれば、それはそれで関心はあるわけですが。

これまでのところ、まだ一週間ですが、これまでのところ特に今回の地震によって新たに脆弱性が明らかになったというようなことはないと思っています。

○記者 すみません。今日の定例会の議題の関連で、今日は決定は見送りましたが、

甲状腺被ばく線量の測定の件ですけれども、一応改正案ではその対象年齢とか測定の方法について盛り込まれているわけですが、今日の議論の中で目的の記載、個人の被ばく線量の推定については難しいとか、取ったデータの扱いをどうするかとか課題が多いというような議論がありましたけれども、今後測定の方法は改正案で決めるにしても、今後の課題というか、実際に測定できるまでの課題というのはどういうふうに認識されてますでしょうか。

- 更田委員長 課題という点で言えば、そうですね、今日、伴委員からも発言がありましたけれども、まだまだ技術的にも様々なチャレンジをはらんでいるんですよ。というのは、事故がありましたと。放射性物質の放射性ヨウ素の摂取が疑われたと。測定をして実際に甲状腺に放射性のヨウ素が滞留したとしますよね。そうすると、それによって個人の線量、どれだけの被ばくを受けたかっていうのを再構築しようとする、滞在時間、どれだけの量がいたかだけではなくてどれだけの量が残ったかとか、それから外部被ばくとの関係で足し合わせなきゃならない部分があって、そうすると、そういったものの再構築をしていくというのは、研究レベルというか厳密なレベルで言えばまだまだいくつものチャレンジがあります。

ですから、私が今日コメントしたのは、そういったチャレンジがあるってことは、チャレンジがあるんだっていうことに分かるように、考え方に書いてほしいっていうのは一つで、一つには私が説明を受けたというのが、非常に短い時間しか検討する時間がなかったというのもあるんですけども、それにしても、目的は甲状腺に溜まる放射線被ばくの、放射性ヨウ素の量を特定することだと言っておいて、一方、その個人の線量を再構築しようとする課題はいくつもあるんです。この考え方でパブコメに答えるのはちょっといかがなものかという印象を持ったので今日の委員会のような指摘になったということです。

- 記者 このデータの扱いについては、実際に測定をしてそのデータをどこが管理するかというのは決まってないというふうにお聞きしたんですけど、その辺の検討というのはどういうふうに進めればいいのかというふうにお考えですか。

- 更田委員長 そうですね、放射性ヨウ素を吸入したかどうか、その事実も測定された時点で吸入がありましたとかありませんでしたっていうのも個人情報になるわけです。その個人の方の判断によってその個人情報は明らかにされたくないという、それはその方の判断に帰属するわけだから。一方で、ケースによってはその後の対処が必要なケースもあるだろう。これは簡単ではないと思います。

特にその個人情報の扱いとの関連というのは、簡単ではないし、こういったその事故の予後の、なんて言いますかね、医療的なバックアップとの関連があるので、なかなか簡単に決まる議論ではないというふうに思います。

- 記者 ありがとうございます。

- 司会 ほかに御質問ございますでしょうか。よそしいですか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

—了—